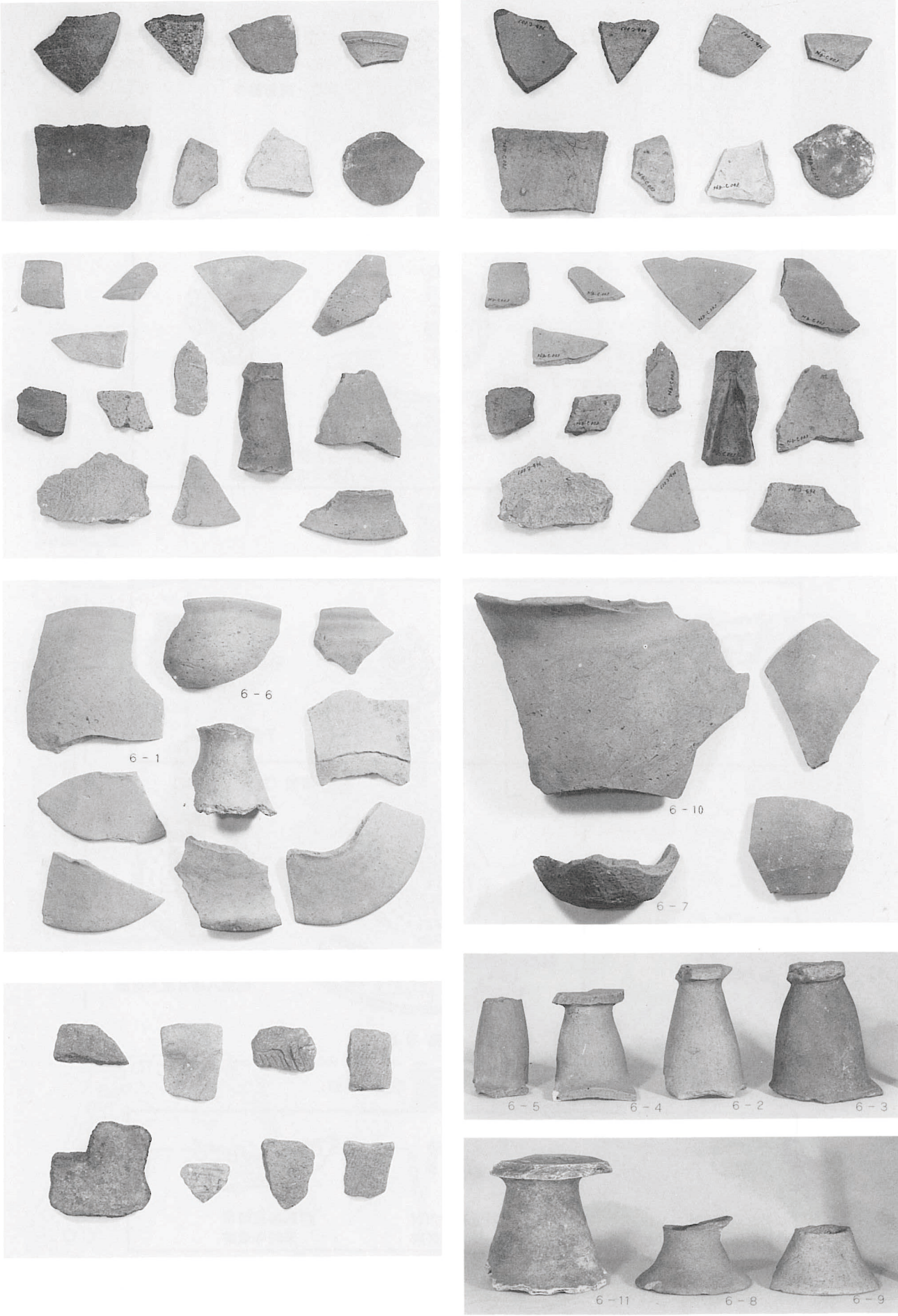
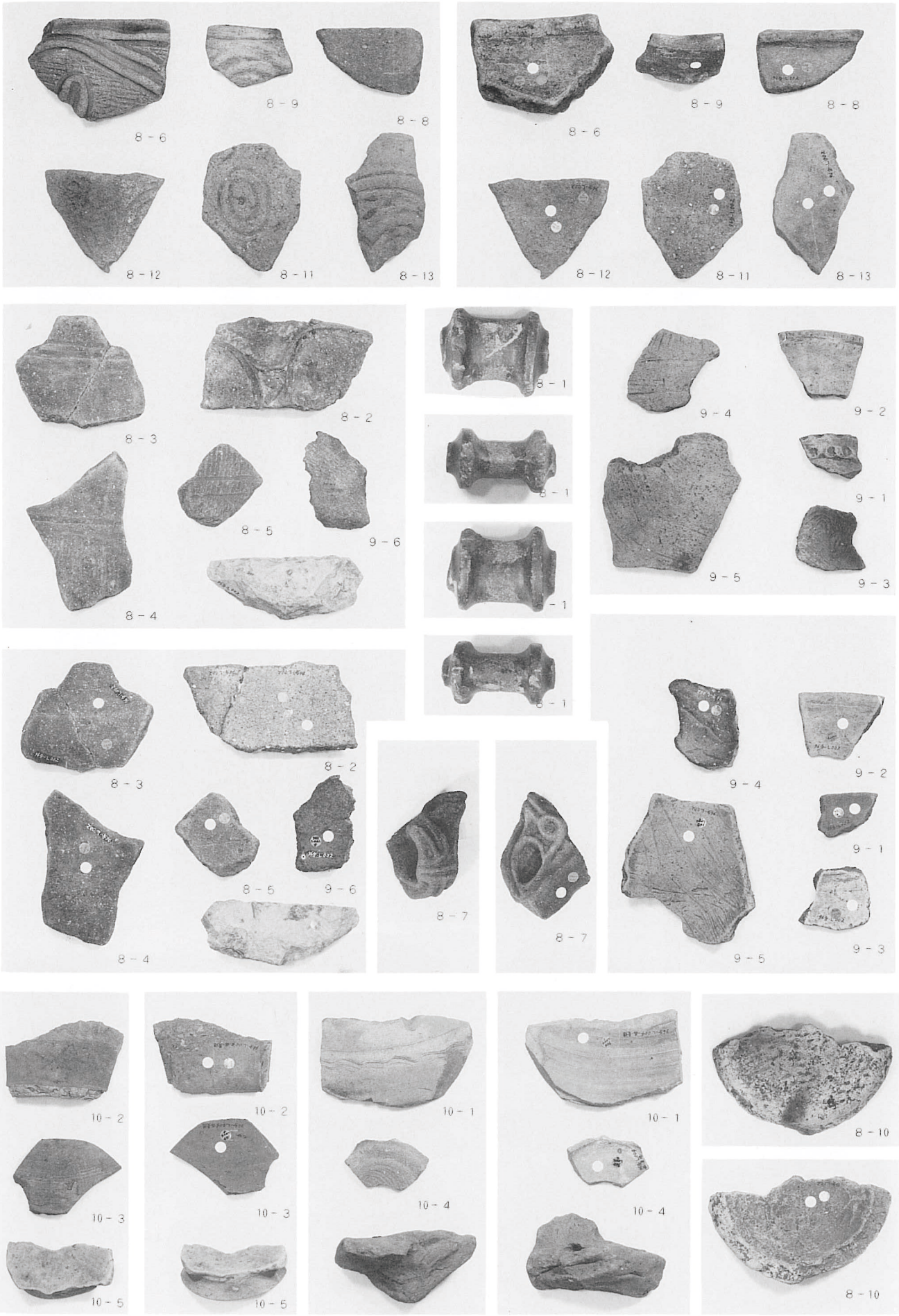


写真図版 2 表採資料



写真図版 3 表採資料

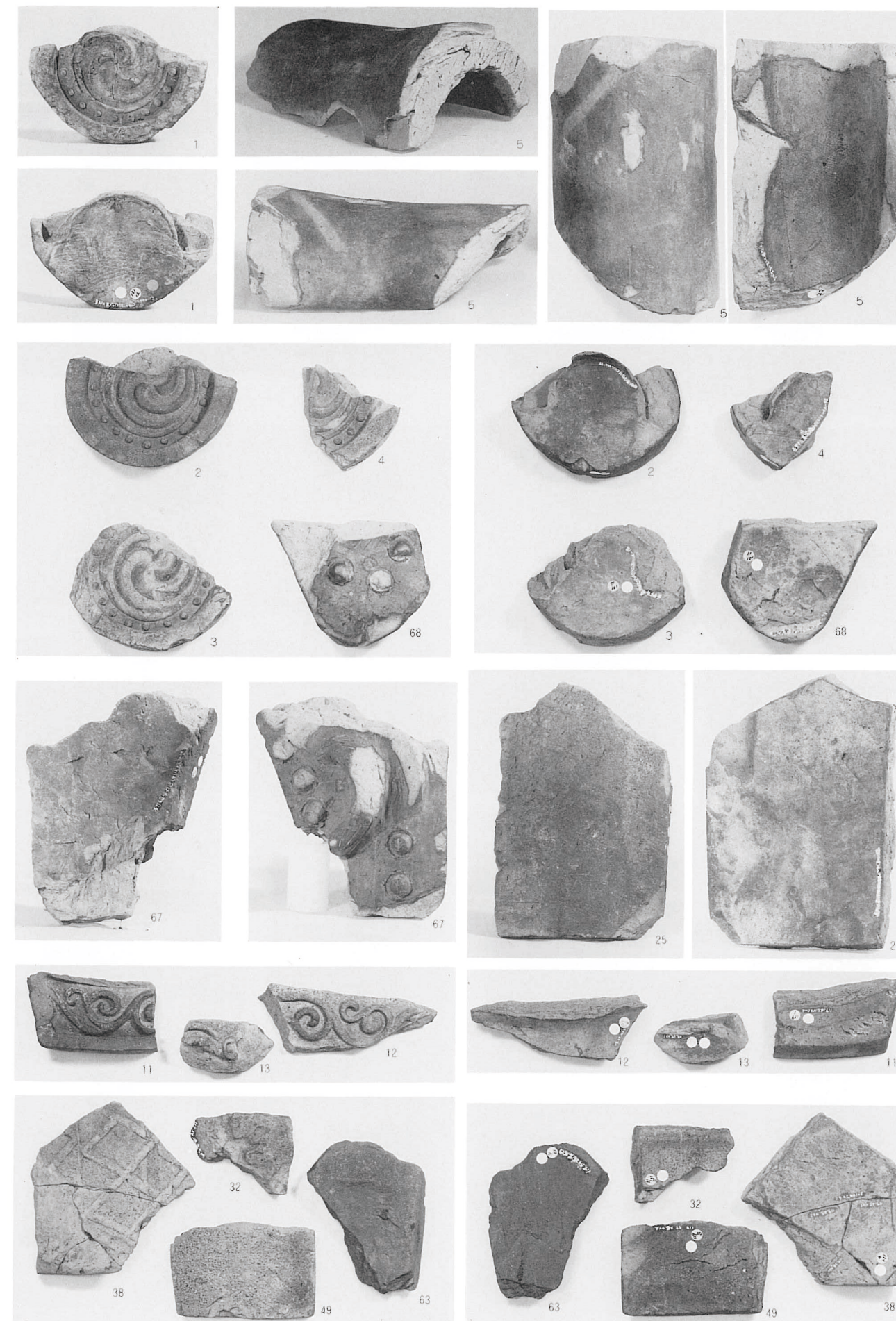


写真図版 4 来迎寺中世遺跡出土遺物



上：浅間山古墳埴輪片
中：浜川北遺跡出土
下：土師質土器皿

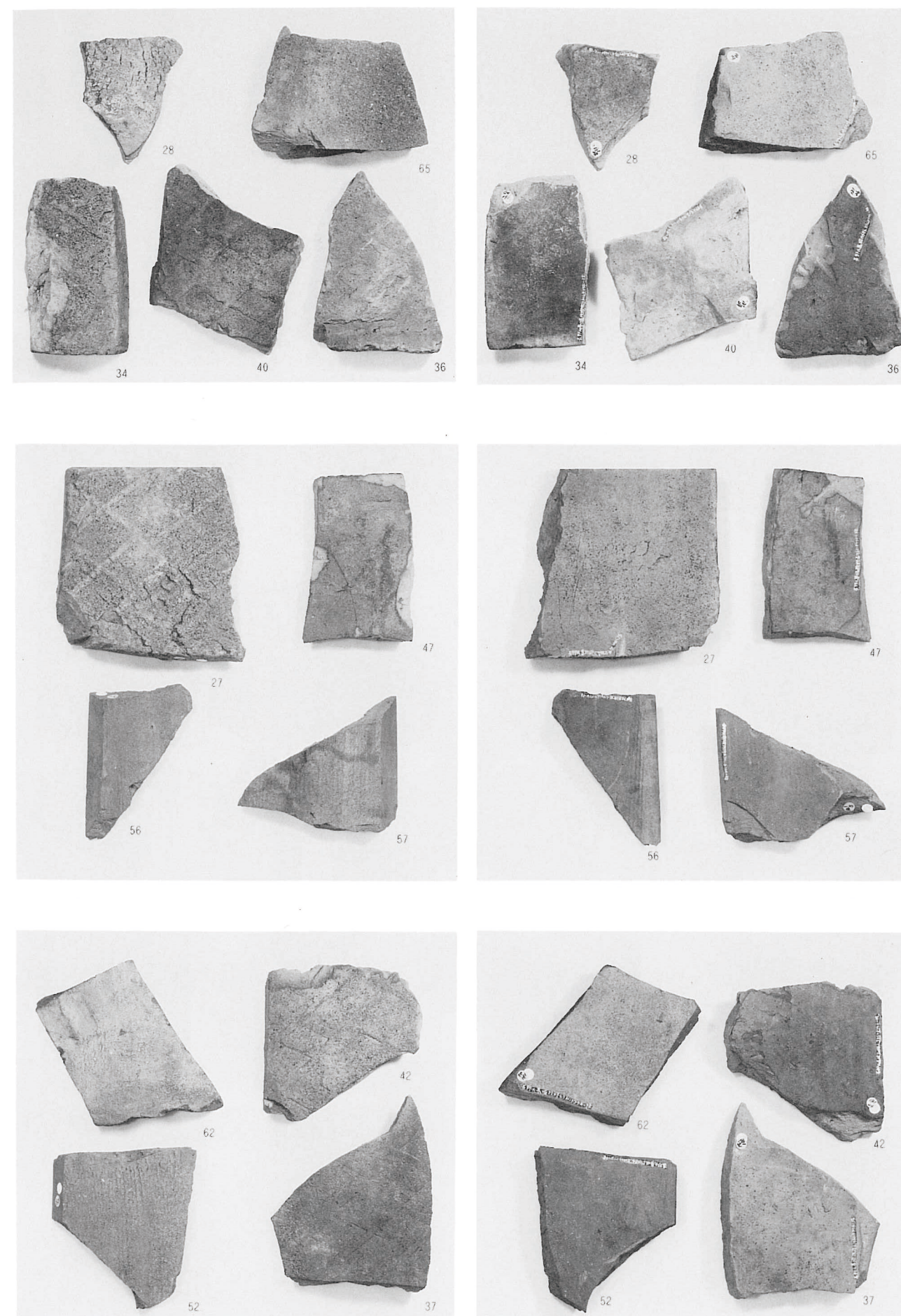
写真図版 5 来迎寺中世遺跡出土遺物



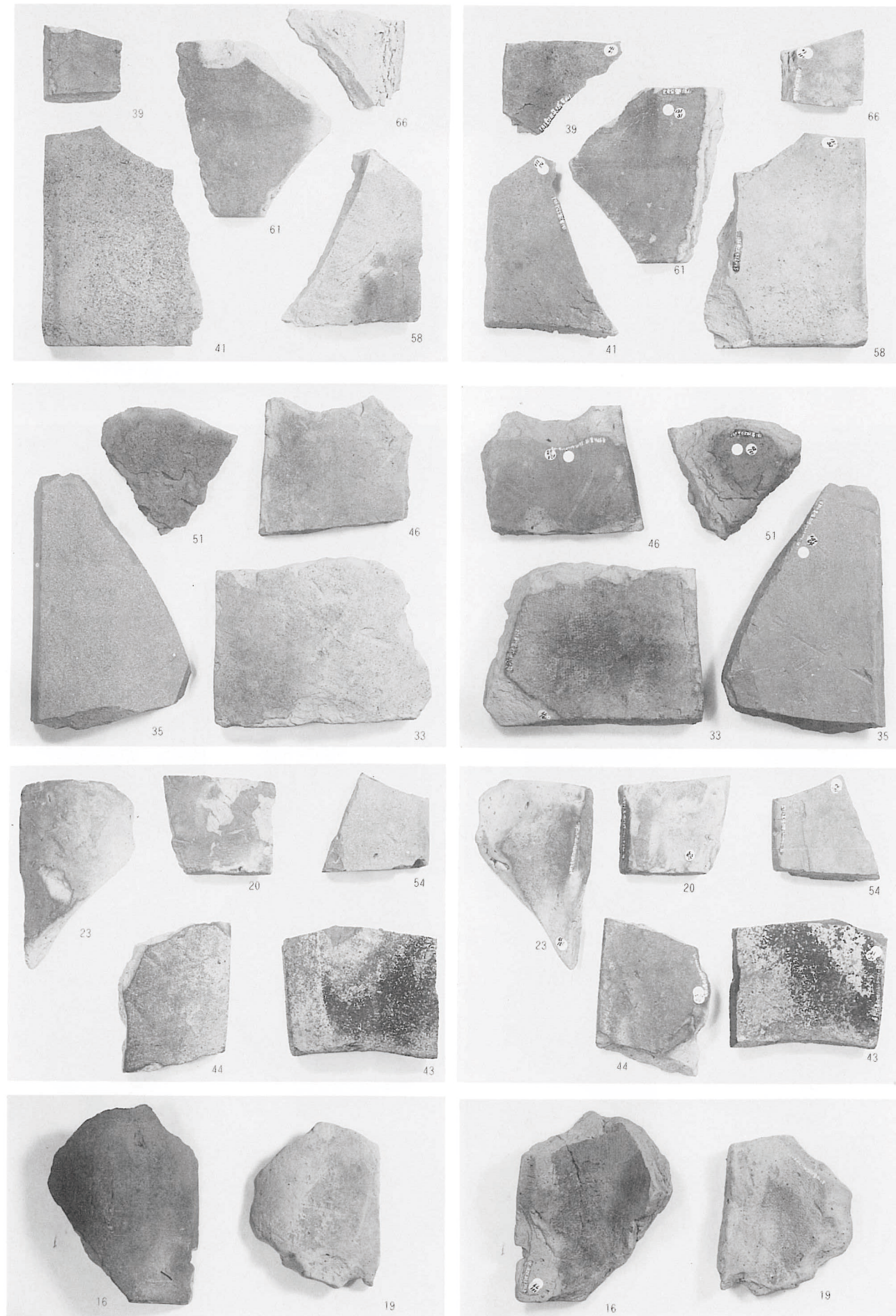
写真図版 6 来迎寺中世遺跡出土遺物



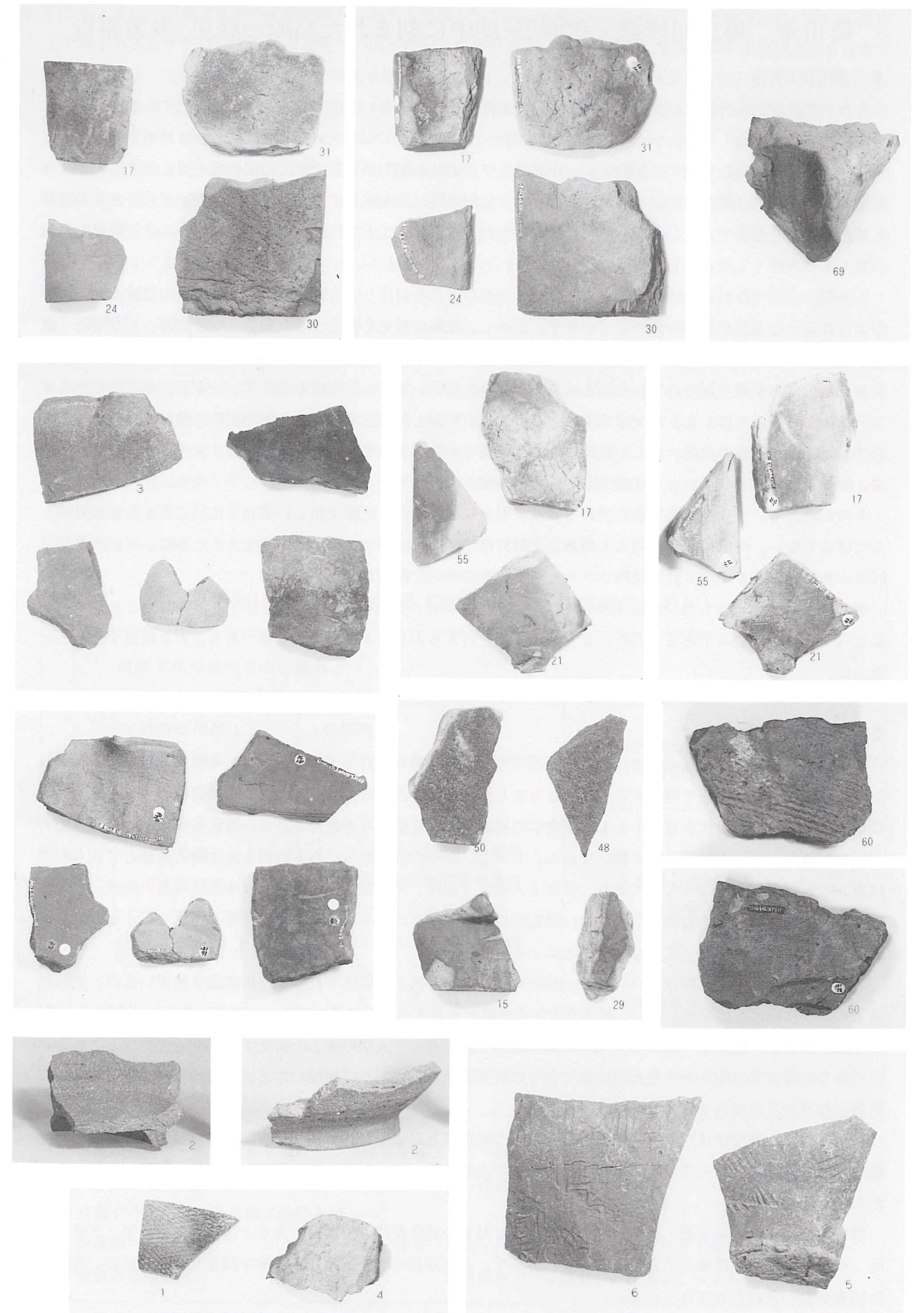
写真図版 7 来迎寺中世遺跡出土遺物



写真図版 8 来迎寺中世遺跡出土遺物



写真図版 9 来迎寺中世遺跡出土遺物



第Ⅲ章 第14回埋蔵文化財展『地中に刻まれた高崎の歴史』事業報告

1 開催の主旨

今日の文化財保護行政は、文化財の保護とその保存・活用という二つの大きな柱で運用されています。この二つの柱は相互に関連し合いながら存在し、どちらか一方に片寄っても本来の文化財保護行政は貫徹することができません。その双方を実現するためには、市民ひとりひとりの協力が必要です。市民の文化財に対する知識と理解無くして文化財保護行政は成り立たず、健全な文化財保護行政を実現する上で、こうした市民の皆さんの理解と協力とが是非必要であることは、すでに多く語られていることで、こうした動きの中から、文化財保護の意識が育くまれてゆくものと思われます。

1年間に全国で行われる埋蔵文化財調査は、1万件以上にものぼり、吉野ヶ里遺跡や三内丸山遺跡の発掘調査のように新たな発見が新聞を賑わせています。しかし、地域の歴史を復元する原動力となるのは、こうした「歴史を塗りかえる大発見」の遺跡ではなく、地道な調査の積み重ねに他ならない。私たちの住む町でもこうした小さな発見の毎日が繰り返されていることはあまり知られてはいません。今日の考古学ブームが、単に流行としてブームとして終わってしまうのではなく、そこに先人の知識と知恵を学び、文化財を正しく理解しようとすることで、新たな私たちの生活＝新しい私たちの文化を築くことが大事です。市民ひとりひとりが文化財に触れる機会、学ぶ機会を多く持つことが必要であると考えます。

そのためにも、文化財保護行政に携わる者は、現在における最も正確で新しい情報を市民に伝える努力を惜しんではならない。今回で14回を迎えた埋蔵文化財展は、まさにこのような目的を達成するために、平成8年10月25日から10月30日までの6日間高崎シティギャラリーにおいて開催された。

準備期間も短く、至らない部分も多々ある展示会であったが、1,000人を越える見学者が訪れたことは、我々にとっても大きな励みであると共に、よりよい展示を行えるよう日々の研鑽が必要であることを痛感することとなった。

2 主題の改題について

埋蔵文化財展事業は、前回まで「埋もれた古代の高崎」と題して行ってきましたが、今回から「地中に刻まれた高崎の歴史」と改題して実施することになりました。かつては、考古学と言うと「文献資料の残っていない時代や、資料が少ない時代を対象」とし、歴史学の補助的な役割のみを期待されていた経緯から、主に、原始・古代を対象としていた時期が長く続いていた。しかし、昨今の情勢から、ある時代を限定的に対象とするものではないことが明らかになってきており、少なくとも、「古代」の言葉が「一般的には中世より前の時代、すなわち奈良・平安時代を含めた時代以前」を、限定的に指して、そのみで埋蔵文化財を取り扱おうとするものの難しさが現実的な問題となってきていることによる。

埋蔵文化財として扱う時代について、一般的には「原始時代」に限定されるように認識されているが、実際にはそのような時代枠は存在しない。日本考古学の始祖とも言うべき浜田耕作氏は、1922年に著した『通論考古学』の中で、考古学の概念を「過去の人類の物質的遺物を資料として人類の過去を研究する学問」と規定している。このように考古学は現在から見た過去全てをその研究範囲としており、極端に言えば、どの時代であっても研究対象となりうるのである。

実際に東京近郊では江戸時代の藩邸や庭園などの発掘調査が盛んであり、江戸遺跡の調査担当者が研究会を開催し、活発な活動を行っている。また、都内汐留の旧新橋駅プラットフォームが発掘調査され、国指定史跡になったことも耳新しい。

群馬県ではこういった近・現代遺跡の研究は、まだその歴史が浅く、活発であるとはいいがたいが、高崎市でも、平成2年度の高崎城三ノ丸遺跡の調査において、旧陸軍第十五連隊関連の遺構を調査したのを始め、先駆的な調査が幾つか行われてきている。

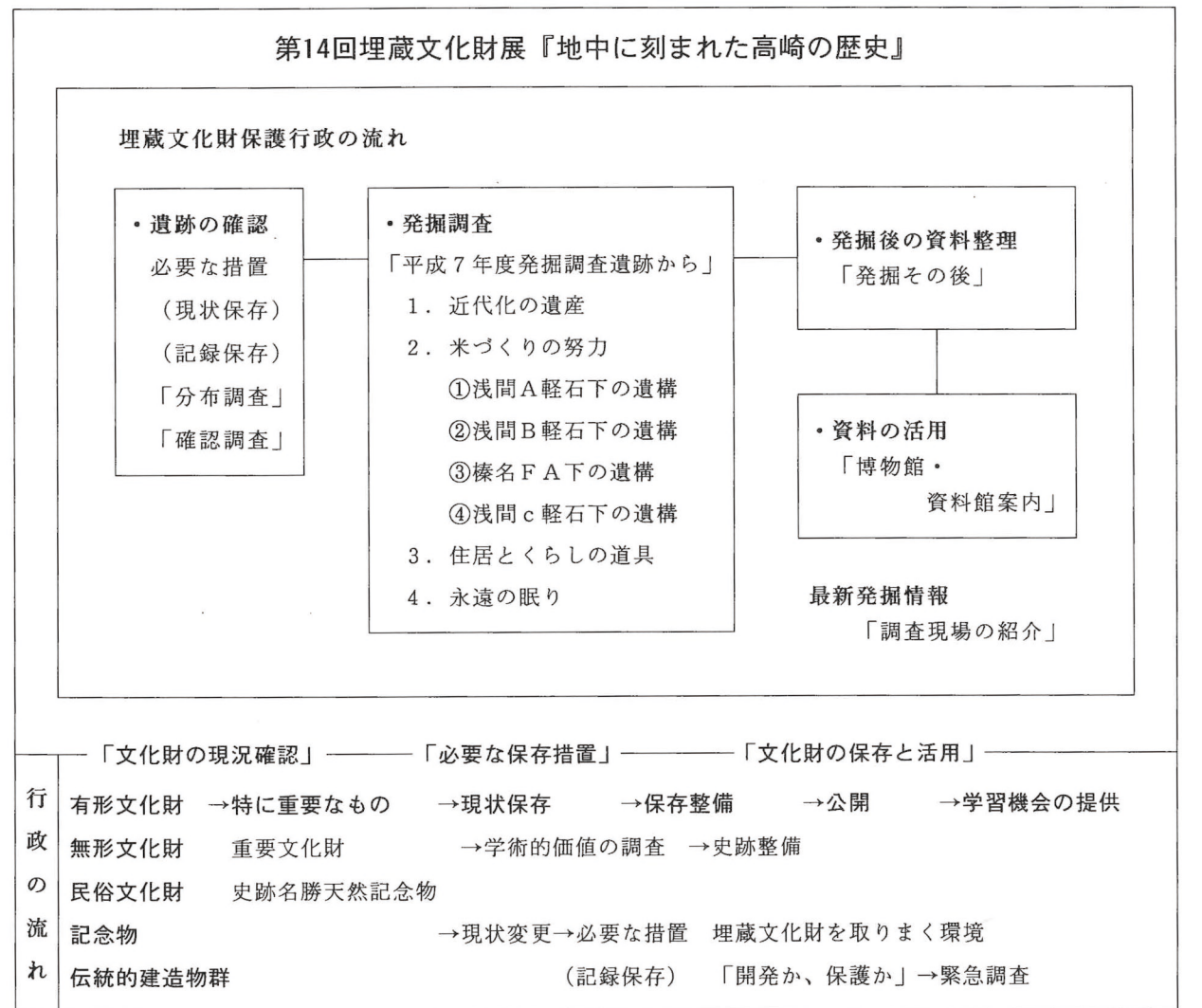
このように、埋蔵文化財の発掘調査が行われる遺構の年代が、古代に限定されず、中世から近世、近代に至るまで含まれるとすれば、「古代の高崎」の題名は実際に発掘調査によって明かとなる遺構や遺物の全てを包含するものではないことから、この際、その実状に合ったものに変更してその趣旨を継承することに至った。そこで、新しい主題を決定するための会議が開催され、新たに「地中に刻まれた高崎の歴史」という主題に改題して今年度から実施することとなった。そこには以下に述べるような意味あいが含まれている。

現在の高崎は、先人たちのたゆまぬ努力と汗の結果として存在しているに他ならない。幾度と無く訪れた火山災害を乗り越え、痩せた土地を耕してきた我々の先人たちが、地中に残してきたもの。それを掘り起こし、研究することで、高崎の歴史を再構築すると共に、未来の高崎の歴史を造っていく土台としていきたい。このような願いを「地中に刻まれた高崎の歴史」という主題に込めています。

3 速報展－展示の概要－

埋蔵文化財展は、前年度の調査成果の速報展としての側面をその主たる目的としているが、ただ各遺跡の成果を羅列的に並べただけでは、我々が掲げる当初の目的を達成したことにはならない。最も工夫すべき点は与えられた素材（遺構・遺物等の資料）をいかに分かりやすく加工して、見学者に提供するかであり、そのためには、展示に対する明確な目的意識が必要となってくる。今回の展示では、高崎市における文化財保護行政の大きな流れを見学者の方に理解していただくことを大目標とし、速報展と現在の情報をその中に組み込んでいく事をねらって企画がなされた。

具体的には下図のような展示構成を採っている。



全体的な展示の流れの中では、文化財保護行政の流れを埋蔵文化財行政に焦点をあてて、どのような過程を踏んで行われていくのかを分かりやすく理解できるように展示を心がけた。

まず、調査に入る前の段階として、分布調査と確認調査の状況を、具体的な調査風景を交えながら展示を行った。この展示により、見学者は自分の身近な地域にどのような遺跡が分布しているのかを確認すると共に、ある地域を遺跡として認定する方法を理解できるようになっている。分布調査も確認調査もほとんど表舞台には出ない地味な作業であるが、こういった作業の一つ一つが、後の発掘調査の基本となる重要な基礎資料を提供していることは知られていなかった。分布調査で得られる幅広い時代の遺物にも興味を示される方が多かったようである。

次は、発掘の実際として前年度（平成7年度）の調査の概要を展示した。この展示は発掘調査の速報展も兼ねており、今回の展示全体の中心となるものである。

遺跡から得られる各種の情報から、地域の歴史を復元する場合、遺跡単独の情報を用いる場合と、いくつかの遺跡の情報を統合して用いる場合の両者がある。今回は、特に後者を重視し、複数の遺跡から得られた情報をまとめ、いくつかのコーナーに分けて、展示を行うよう心がけた。展示の主体となるものは、発掘された遺物と遺構のパネル写真である。

「近代化の遺産」のコーナーでは、前年度調査された東町Ⅴ遺跡、栄町Ⅰ遺跡、真町Ⅰ遺跡の調査成果の中から、特に、明治時代以降のものを選び出し、展示を行った。これらの時代の遺物を、一つのコーナーとして取り扱うのは、高崎市では初めての試みであり、展示方法などに試行錯誤があったが、身近な遺物であることもあり見学者の注目を集めていた。今後、市街地中心部の再開発に伴い、このような近・現代遺構の調査がますます増加していくことが推測される。そのためにも、古い時代の遺跡同様、新しい時代の遺跡にもスポットを当てることは重要な意味を持っていると言えよう。

「米づくりの努力」のコーナーは、「浅間A軽石下の遺構」「浅間B軽石下の遺構」「榛名F A下の遺構」「浅間c軽石下の遺構」に細分し、前年度市内で調査された水田遺構の総括を行った。高崎市内の発掘調査では水田遺構の調査事例は比較的多く、蓄積された情報量は豊富である。しかし、水田経営の実際について未だ不明な点が多いことも事実である。昨年度の調査では、これまでにあまり調査の例が見られなかった江戸時代の水田遺構が発掘され、注目を集めた。これらの新しい調査成果と、蓄積された情報を照らし合わせる事により、高崎市における水田耕作の歴史の、より詳細な復元が可能となってくるであろう。

「住居とくらしの道具」のコーナーでは、竪穴式住居・掘立柱建物の遺構写真と出土遺物の展示を行い、併せて家屋文鏡に見られる4種の住居の拡大写真を展示し、具体的なイメージで「住」空間をとらえられるよう工夫を凝らした。

「永遠の眠り」のコーナーでは、弥生時代の方形周溝墓から中世の火葬墓まで、パネル写真を中心とした展示を行い、特に三島塚古墳と上並榎稻荷山古墳については、出土した円筒埴輪の実物を展示し、注目を集めた。

「発掘その後」のコーナーでは、発掘現場での調査の後、どういう行程を経て報告書が作成されるのかを、実際に使用している実測用具等と実測図、完成した報告書を展示することで示そうと試みた。パネルの写真では、土器接合の様子や、注記の様子などの作業風景を知ることができるようになっている。このコーナーに近接して、体験コーナーが設けられており、土器の拓本と縄文の施文を実際に行えるようにした。体験学習は、小中学校でも積極的に取り入れられている学習方法であり、本や授業で得られた知識を再確認したり、学習に対する興味を抱かせる最も効果的な方法として知られている。実際このコーナーは、子供から老人まで最も人気が高かった。

「最新発掘情報」のコーナーでは、古墳発掘中の剣崎長瀬西遺跡の紹介がなされ、リアルタイムの情報を流すことに務めた。

毎年、こうして繰り返されている発掘調査を中心とした文化財保護行政の流れを、調査した遺跡の紹介にとどまることなく理解していただけるよう工夫し、展示を作った。これを次に活かすためにも真摯な御叱声を頂きたいと願っている。

4 平成7年度発掘調査概要

平成7年度に高崎市教育委員会が埋蔵文化財に対して実施した事業は、遺跡の確認を目的とした試掘調査、立ち会い調査は86件、発掘調査は直営・委託を併せて24件である。また、遺跡の周知と分布地図作成を目的とした詳細分布調査も市内中央部を対象に行われた。本市の埋蔵文化財保護行政は、こうした分布調査・確認調査・発掘調査を通じて行われている。こうした調査の結果は、成果としてまとめられ、情報として市民に提供され、その活用を図るべく公開されるべきものと考えられる。

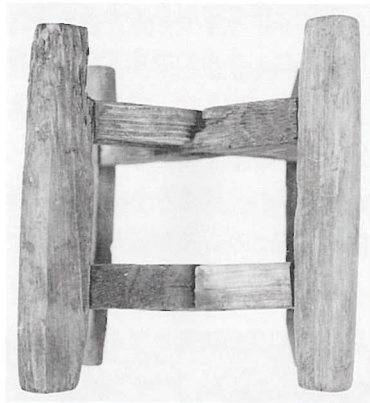
埋蔵文化財展では、平成7年度中に実施された調査から、その成果を速報展として市民に公開するために企画された。展示された遺跡は平成6年度に調査され、その成果を公開できなかったものを含め、26遺跡について検出された遺構や遺物の公開を行った。



平成7年度埋蔵文化財発掘調査遺跡

1 矢中村西遺跡	11 下之城村前Ⅱ遺跡	21 倉賀野上稻荷前遺跡
2 三島塚古墳	12 寺尾東館Ⅲ遺跡	22 史跡日高遺跡試掘調査Ⅱ
3 東町Ⅴ遺跡	13 稻荷町Ⅱ遺跡	23 飯塚大道東遺跡
4 栄町Ⅰ遺跡	14 旭町Ⅰ遺跡	24 倉賀野中里前遺跡
5 栄町Ⅰ遺跡	15 上中居平塚Ⅱ遺跡	(平成6年度調査)
6 島野大岩Ⅱ・一ツ谷東Ⅰ遺跡	16 中尾村前Ⅴ遺跡	25 剣崎長瀬西遺跡
7 上並榎稻荷山古墳	17 高関東沖Ⅱ遺跡	(平成8年度調査)
8 双葉町Ⅰ遺跡	18 並榎北Ⅴ遺跡	26 豊岡後原Ⅱ遺跡
9 下小島町頭Ⅱ遺跡	19 下中居条里遺跡	(平成8年度調査)
10 上中居平塚Ⅰ遺跡	20 南大類東沖遺跡	

高崎駅周辺の再開発事業に伴い、調査が行われた東町Ⅴ遺跡・栄町Ⅰ遺跡・真町Ⅰ遺跡では、整地により厚く堆積した蒸気機関車の石炭ガラの中から、江戸時代から、明治・大正時代に至るおびただしい量の遺物が出土した。特に、東町Ⅴ遺跡では、製糸工場の跡地から、当時の女工が使用したと考えられる生活用具や工場の様子を彷彿とさせる糸巻き車などが出土し、注目を集めた。これらの遺跡からは、天明三年（1783年）に浅間山が噴火した際に埋没した水田を復旧した痕跡も検出されており、文献資料では不明な点が多かった近世の水田経営の実態を示す貴重な資料を提供している。



製糸場出土遺物・東町Ⅴ遺跡



炭がら層出土遺物・真町Ⅰ遺跡

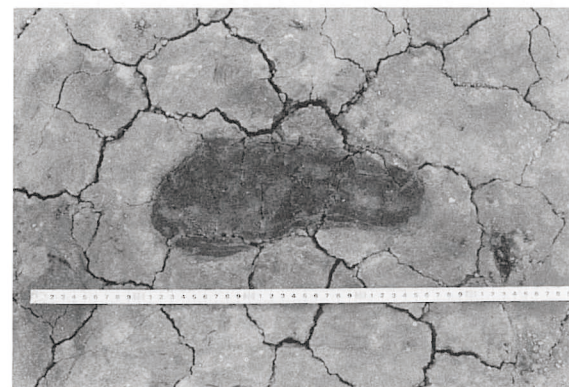
天仁元年（1108年）の浅間山の噴火により埋没した水田跡は、上記3遺跡の他に、高関東沖Ⅱ遺跡・上中居平塚遺跡・下中居条里遺跡・中尾村前Ⅴ遺跡・矢中村西Ⅰ遺跡・島野大岩Ⅱ遺跡・下之城村前Ⅱ遺跡など、平成7年度に高崎市が調査を行った24遺跡のうち、実に18遺跡から発見されている。これらの遺跡の調査成果から、当時の水田が、烏川左岸の台地上に広く分布していたことがわかってきている。この水田からは人や、馬などの動物の足跡が発見されることが多く、下之城村前Ⅱ遺跡からは牛の歩行の跡が、栄町Ⅰ遺跡からは人の歩行の跡が検出された。



水田復旧痕・東町Ⅴ遺跡



畦の様子・下中居条里遺跡



水田面に残る足跡・栄町Ⅰ遺跡



牛の蹄の跡・下之城村前Ⅱ遺跡

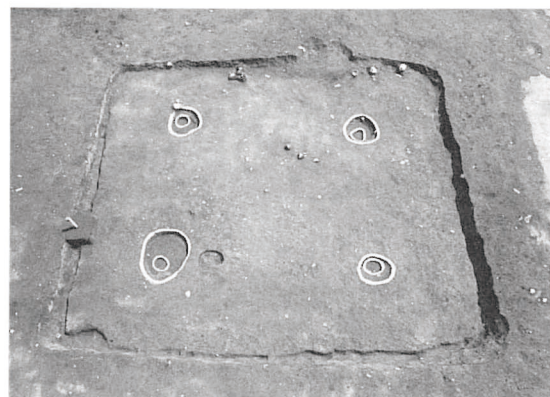
双葉町Ⅰ遺跡・倉賀野中里前遺跡・倉賀野上稲荷前遺跡・寺尾東館Ⅲ遺跡では、古墳時代や平安時代の竪穴式住居が発見された。遺構の遺存状態は良好ではなかったが、土師器、須恵器を中心とした生活用具が多数出土している。また、南大類東沖遺跡・真町Ⅰ遺跡では、掘立柱建物が検出された。一般的に掘立柱建物は建築された時期を決定するのが難しいとされるが、真町Ⅰ遺跡のものは、共伴する遺物や遺構の検出された面から、江戸時代の建物跡であることが確認されている。



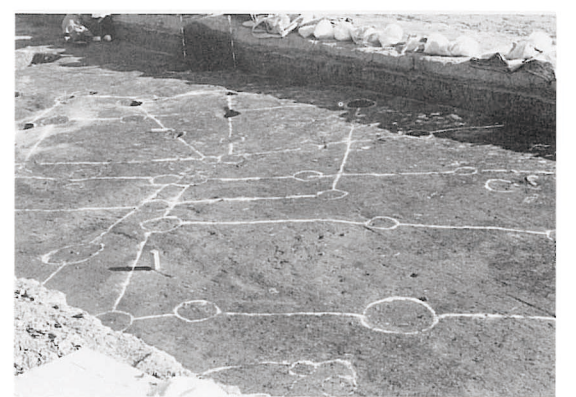
小区画水田・下小鳥町頭遺跡



発見された水田・中尾村前遺跡



竪穴式住居跡・倉賀野中里前遺跡



掘立柱建物跡・南大類東沖遺跡

平成7年度の調査では、弥生時代・古墳時代・中世の墓の遺構が発見された。南大類東沖遺跡では、弥生時代の代表的な墓の一つである方形周溝墓が検出されている。上並榎稲荷山古墳と石原三島塚古墳の調査では、大量の円筒埴輪が発見された。特に、三島塚古墳の埴輪は、綾杉文と呼ばれる特殊な文様が施されたもので、県内に殆ど類例が無く、注目を集めている。また市内中心部に近い稲荷町Ⅱ遺跡でも埴輪を持つ古墳が調査されている。倉賀野中里前遺跡では、中世の火葬土坑と呼ばれる遺構が確認された。これは、遺体を茶毘に附すための施設であり、ここから骨を拾い、壺に納めて他の場所に墓を建てて葬ったものと推定される。



綾杉文の埴輪・三島塚古墳



火葬土坑・倉賀野中里前遺跡

5 課題と今後の展望

今回の展示では、前述のような展示構成を元に、立体的な展示が行えるよう工夫を凝らした。しかし、展示を終え、いくつかの反省点が指摘されたので、今後の展望を含めて、まとめておきたい。

今回の展示の中心となるものは、遺物と遺構の写真パネルであり、会場の広さとの兼ね合いから、極力文字による展示を少なくし、解説員の説明でそれを補おうとした。しかし、見学者が多くなると、充分な解説が不可能となり、展示の流れを理解していただけなかった方もいたようである。展示の主旨を明文化し、必要に応じて文字の解説を多くする必要があるであろう。

今後は準備期間を長く設け、展示の内容に対する検討をより深めながら絶えず新しい展示の工夫を行っていきたいと思う。

高崎市文化財調査報告書第153集
高崎市内遺跡出土資料整理報告書1
—平成8年度資料整理報告—
—市内遺跡採集資料整理報告—
—寺尾町・山名町採集資料他—
浜川北遺跡出土中世瓦資料整理報告
第14回埋蔵文化財展事業報告

印刷 平成9年3月25日
発行 平成9年3月31日

編集・発行 高崎市教育委員会
群馬県高崎市高松町1

印刷所 野島印刷株式会社
高崎市八千代町4-8-14

